

第2回県庁周辺県有地等の有効活用に関する検討会 主な意見

日時：令和7年10月20日（月）13：30～14：40

場所：県庁4階大会議室

（主な意見）

京田委員

- ・塩倉橋周辺のエリアマネジメント組織を上げた。城址公園や桜木町再開発地区、松川等のエリア活性化を進めていきたい。「ウォーカブルで一体的な歩行者空間」に関連して、今年から始めた市民プラザの「ますます富山」まち歩きツアーには多くの住民が参加した。住民が地域への愛着を深め、まちづくりへの関心を高めることが重要。
- ・立山の美しさで勘違いしがちだが、お隣の金沢に比べてまちなかの緑が不足している。県庁の平面駐車場を廃止し「緑のオープンスペース」を確保することは非常に大きな意義がある。
- ・「松川べりの水辺公園」については、過去に多様な意見があり実現に至らなかった経緯がある。しかし、今回は県と市が一体となって取り組む絶好の機会であり、住民憩いの場となるだけでなく、観光誘客の両面で大きな価値を生み出すものと期待している。
- ・「回遊性の向上」について、市民プラザとしても様々な仕掛けを行っていきたい。また、県庁南側や市役所南側、桜木町再開発地区北側の市管理道路の車両通行を止めて歩行者空間とすることで、松川べりの親水空間とも連携でき、エリアの一体感を高められる。

齋藤委員

- ・ヨーロッパの都市における市庁舎前の広場が、交通規制を敷いたウォーカブルな空間として賑わい、街の中心を活性化させている状況は理想的。県庁舎周辺も同様の魅力を持つ空間を目指すべき。
- ・「ありたい姿」の3番目に掲げられている「公有地に県内外の多様なプレーヤーが集まり、産官学民が連携する」という目標に対して、県庁舎内やその周辺に、スタートアップ企業が集積・交流し、全国の企業や出資者と相談できるような拠点を設けてほしい。これにより、産業界、金融関係者、若手研究者、学生など、幅広い層の人材が集まり、多様な交流が生まれる。
- ・県庁舎内に富山大学のランチを出す構想もある。実現すれば、産学連携の強化、産業

界との連携拠点、共同研究の促進など、多岐にわたる効果が期待できる。多くの人々が利用できるこのようなスペースを設けることで、県全体の活性化に大きな効果をもたらす。

品川委員

・重要なポイントとして「空間デザイン」を挙げたい。松川べりから県庁、公園、NHK 跡地までを一体的なエリアと捉え、その空間をトータルでデザインすることが有効。昨年実施したアイデアコンペでは多数の魅力的な案が出されており、専門家や意欲ある民間事業者から空間デザインのアイデアを幅広く募り、県民の総意を得られる形で進めてほしい。

・同様に「県庁舎本館のあり方」も重要。後世に残し次世代に活かす施設として活用すべきであり「産業博物館」的な用途を盛り込んでほしい。県内には美術館や一般の博物館はあるが、産業博物館と明確に言える施設がない。若者の県外流出やものづくり・理系離れが進むなか、富山県の優れた技術や歴史、産業を広く発信する拠点とするのも良い。県外や海外にPRするとともに、住民がふるさとへの誇りや愛着を育む場となる。

・県庁舎本館をこのプロジェクトの中心に据えて、全部開放するのか執務室を残すのかの方針を早期に決定し、知見のある民間事業者やコンサルティング会社の意見を幅広く聞きながら、今後の整備を進めてほしい。

園田委員

・基本構想の「打ち出し方」に関しては具体化が必要。具体的なアクションに入る前に、このエリアが将来的にどのような「パブリックライフ」を提供する場となるのか、つまりウォーカブルな空間や緑のオープンスペースを住民や来訪者が「誰が、どういう時に、どんな気分で」過ごし、何を感じられる場になるのかを、より具体的に盛り込むべき。

・特に「県庁舎本館のあり方」が他のアクションに与える影響が極めて大きい。働く職員や来庁者が多く、昼間の過ごし方や夕方夜間はどうかなど時間帯別の利用状況を考慮するとともに、多くの意見に出てくる「若い世代や親子連れ」などの具体的な過ごし方の目標を示すことで、必要な機能や空間の可能性がより理解されやすくなる。これまで開催したアイデアコンペやサウンディングから読み取れる「エリアでの多様な過ごし方のイメージ」として強調すべき。

・今後の進め方は、ロードマップとまではいかなくとも構想策定後の方向性を盛り込むことで、周辺事業者や関係者が次のステップの見通しを持てるようになる。

牧田委員

- ・現在、人口減少社会にどっぷり浸かっており、過去に経験してきた古き良き昭和の賑わいや風景は絶対に戻らないという現実がある。これを踏まえると、エリア構想は抽象的な表現が多く、根源的に「いかに価値を創出するか」をより深く考える必要がある。
- ・その「価値」の本質は「上質感」であり、「普段よりも少し良い」を感じられるエリアにしていくということ。そしてエリアのウェルビーイングとは、それぞれの人の自分らしい「時間価値」を大切にすることであり、人間の根源的な欲求である「好奇心」を満たすことが「時間価値」を高めることにつながる。
- ・NHKの番組「ブラタモリ」や「富山検定」のような、学びや発見を通じて富山への親しみを醸成する具体的な仕掛けを構想に盛り込むべきで、単なる「魅力」や「価値」という言葉だけではなく、一步踏み込んだ「好奇心を満たす上質な体験」を訴求することで、他にない構想になる。
- ・今後の推進体制として、「富山県庁周辺エリアマネジメント懇話会」のような、県・市そして多様な民間関係者が一堂に会する横断的な組織を設置するのが良い。

水田委員

- ・エリアコンセプトをさらに深掘りし具体的なコンテンツを含めた検討が必要なフェーズに入ってくる。公共ならではの集客力や求心力で人流を創出してほしい。県庁舎がまちの中心部に位置することの重要性を理解し、どのような人々が、どのような時間帯に集まり、どのように行動し、次にどこへ移動するのかを考察することで、周辺エリアとのウォークアブルな連続性・回遊性へと繋がる。
- ・県庁舎本館が大きな公園のなかにあるエリアになれば環水公園とは違ったものになる。公共オフィス機能や多くの就労者、桜木町や商店街との近接性、居住者ニーズなどを踏まえた具体的な活用計画を次のステップとして示すべき。県庁だけでなく富山市役所にも職員や来庁者が大勢いるので視野に入れた検討を。さらに広くは、環水公園やいたち川、松川のウォーターフロントを含めたものになると良い。
- ・産業博物館的な活用では、産業を感じさせつつも遊び心やインタラクティブ性、デジタル技術（DX）を活用した「体験をメインとするユニークな施設」とすべき。迎賓館的な利用や、京都の平安神宮会館のようなユニークベニューの事例も参考にすべき。
- ・エリアマネジメントのあり方は、ルールづくりや活用方法、イベント企画に終始しがちだが、既存メンバーに新規の活動者が入る際の摩擦調整を行い、コミュニティとして一体

化していくプロセスも重要。

- ・ エリアマネジメント組織のあり方は重要で、県や市の庁内縦割りを乗り越える調整役としてのプラットフォーム機能を担えると良い。そして、県庁周辺エリアマネジメントが、他の周辺エリアマネジメントを連携・統括するような「司令塔」として機能するのが理想。

西村座長

- ・ 提示された5つのアクションプランはまだ抽象的であり、富山県庁周辺エリアが持つ具体的な土地の「物語性」をより強く打ち出すべき。それが富山らしさである。

- ・ もともと富山城内にあった富山県庁が城内から松川を挟んで隣接地に移転した全国でも珍しいケースは廃川地があったことで実現したことで歴史的な物語性に富んでいる。そうした経緯や県庁舎と市役所が隣接している珍しさ、さらに県庁舎本館は北側と南側の両側を正面として機能できるよう設計された建物であることを広く知ってもらえると良い。建設当時の意図である「両側が開かれたパブリックな場」として住民が通り抜けられる動線を歴史的な意味を込めて復活すべき。

- ・ 県庁前公園は昭和時代のデザインで周囲を高木で囲っていて古さを感じてしまう。NHK跡地や県庁舎等の周辺との有効な接続が必要。また、県庁舎本館の東側に一本の古道があり富山城へとつながる元塩倉橋の遺構が松川茶屋付近に残っているので橋を復活させると面白い。そうした周囲の小道を含めて車と歩行者の動線を分離することで魅力的なエリアを創出できる。

- ・ 委員全体として構想の方向性に異論はないが、さらなる具体化を目指してほしい。